

偏愛彩色ヴェルドル特典『マイ・フェアドル』

最初に起こった『変化』は、たぶん声変わり。

可愛くてお気に入りだったボクの声が、

大人の男の声へと『変化』し、ボクは大いに絶望した。

のど飴を舐めたり、動画を見ながらボイストレーニングをしたりと自分なりの努力を繰り返したが、ボクの声が戻ることはなかった。

それどころか、追い打ちをかけるように、次は肉体の『変化』があった。それまで可愛い可愛いと繰り返していた周囲のボクへの扱いが、
とんだ『男』を見る目へと『変化』していった。

ごく一般的な男子としての成長期は、ことごとくボクの心を傷付けていく。小学校の時から一緒に遊んでくれていた女子グループが
ボクを仲間に入れてくれなくなり、更にはグループの数人が告白してきた。性別を超えた友達としてではなく、恋愛対象となる
『一人の男』として扱われるようになったことが、この上なく辛かった。

べつに、女になりたいわけじゃない。

だけど、男でありたいわけでもない。

性別なんて超えて、自分の好きなスタイルを貫きたいだけだ。

とくにボクは小さい頃から可愛いモノが好きだったから、
そういうファッションやアイテムを選びがちだったというだけなんだ。

だから、ボクは自分で、自分の居場所を作り上げた。

服飾関係の学校や、好きなアパレルブランドの店へ通い続け、

SNSでも頻繁に自分で作った洋服や着飾った自撮りを掲載し、

気付けば『男の娘』界隈で有名な『ユズ様』として扱われるようになっていた。

最高に可愛い姿で時を止めたボクの自撮りで、
何万人ものファンが喜んでくれる。

こんなにも嬉しくて幸せなことは無いと思った。
ただどその裏では、心を引き裂くような『変化』もたくさんあった。

SNSで発信し始めた頃、学生時代から付き合いのあった友人たちが、聞くに堪えない差別的な冗談を向けて来たり。

ボクの全てを受け止めたいと言ってくれた恋人が、

結局はボクの肩書きにしか興味が無く、

裏ではボクの知名度を利用して色んな人に迷惑をかけていたり。

ボクがボクのままで在り続けようとする度に、周囲は大きく『変化』していった。一方でボクは、洋服とメイクによって完璧な『不変』を手に入れた。

みんなは、洋服やメイクで違う自分へと『変わる』のだと言うが、

ボクはむしろ、次々と『変化』していく自分自身を、洋服やメイクによって『変わらないありのままの自分』へと繋ぎとめているような感覚だった。

だからボクはオシャレが好きだ。

男でも女でもない。

だけど、男らしくも女らしくもある『ボク』を、オシャレは決して裏切らない。

ボクはボクのまま、変わらずにいたい。

性別や老い、体格といった『変化』を恐れない、最高に可愛い『不変』で在り続けたい。



ボクが【彼女】のことを意識し始めたのはいつぐらいからだっただろうか。お店専用のタグで検索していた時、ふと目に付いた一つの投稿。前半部分は、ボクのお店や服を褒めてくれていた。

控えめそうな性格が伝わってくる、非常に慎重で、丁寧な言葉を選んでくれたんだとわかる文章。

だけど後半部分の文章にボクは目を奪われた。

そこには、『洋服やメイクは自分が変えられてしまい、戻れなくなってしまうような恐さがある』と書かれていた。

とても不思議な感覚だった。

彼女の言っていることがまるで理解できないような気持ちでもあり、しかし何故か言いたいことがわかるような、そんな不思議な感覚。

彼女は文章の最後に

『だからユズ様みたいに、しっかり自分を持つている人こそ、オシャレによる『変化』に飲み込まれないのかな』と添えていた。

その投稿を読み終えていた時点で、

たぶんボクは彼女に心を奪われていたんだと思う。

ボクにとって、オシャレは『自分を変えないためのもの』だった。

だけど彼女にとってのオシャレは、『自分を変えるためのもの』なのだという。

気付いた時には、彼女のアカウントから、これまでの投稿を眺めていた。何気ないおはようの挨拶や、日々の何気ない呟きに、食べ物写真。そんな中で目に付いた二つのこと。

一つは、彼女の友人と思われる子が、

ボクを熱狂的に支持してくれるファンだということ。

確かイベントでも何度か見かけたことがあるし、

おそらくその子の繋がりで彼女はボクのことを知ったのだろう。

そしてもう一つは、彼女があまり自分に自信を持っていないということ。

だからオシャレを恐がっているし、

自分を『変えられてしまう』と捉えている。

けれど、オシャレに興味を持っていないわけでもない。

興味があるからこそ、ボクや、ボクの作る洋服に憧れのような感覚を抱いている。

彼女のことを知れば知るほど、驚くぐらい感情が昂った。

初めてフリルたっぷりの服を着たあの時のように。

初めてメイクを覚えて鏡を眺めたあの時のように。

初めて『男の娘』でデビューしたあの時のように。

様々な方向の創作意欲が溢れて止まらない。

彼女に似合う服を作りたいと思った。

自信が無いという彼女に、

キミがどれだけ魅力的なのかわからせられるような、

圧倒的なオシャレを教え込みたい。

上から下までボクがコーディネートした彼女と、
都心のファッションショップを一緒に巡りたい。

たまに双子コーデなんかしちゃって、仲が良すぎる姉妹ってコンセプトで、
写真をたくさん撮るのもありかもしれない。

きつと彼女は、事あるごとに自信が無いって言うと思う。

だけどその度にボクが極上のオシャレを提供して、

誰よりも可愛いつて言つて、そしてたくさん愛してあげるんだ。

少しずつ彼女が自信を持つようになっていく様子を、

ボクだけが独り占めできたら最高だと思う。

そこまで考えて、ボクは我に返った。

たった一つの投稿。それだけで、ここまで彼女に思いを馳せてしまうなんて、
ぶっちゃけ正気の沙汰ではない。

だけど……だけと彼女のことがやっぱり気になって仕方なかった。
何よりもボクの頭の中はもう、彼女をたくさん着飾って、
彼女とたくさん愛し合う妄想でいっぱいになっている。

彼女のためなら何着でも服が作れる気がするし、
彼女のためなら何時間でも愛を捧げられると思った。

つまりこれって、恋してるってことなのだろうか？

わからない。

わからない、けれど……彼女がボク以外の誰かのモノになるのは嫌だった。

オシャレによつて『変えられてしまうこと』を恐がるキミ。

ボクとは真逆の解釈を持ちながらも、

ボクと同じようにオシャレに興味を持っているキミ。

ねえ、気付いてる？

自分を『変えられてしまう』かもしれないって恐がるってことは、
なんだかんだ、キミはしっかり【自分】ってモノを持っているってことなんだよ。

ちゃんと【自分】を持っているから、

『変えられたくない』って、そう思うんじゃないかな？

それってね、ずっとボクが求めてやまないモノなんだ。

男としても女としても生きたい、欲張りで、

それでいていつだって迷子のような寂しさを抱えるボクはね、

オシャレのお陰でようやく【自分】を見付けられたような気がした。

だけどキミは、オシャレが無いままでも【自分】がある。

【自分】を持っているから、オシャレで『変えられてしまうこと』を恐がっている。

キミはボクへ憧れを向けてくれたけど、

ボクこそキミに憧れているのかもしれない。

キミのオシャレへの解釈を目にしただけで、

こんなにもキミのことで頭がいっぱいになってしまっぐらいに……

ボクはキミに強い感情を抱いてしまった。

だからキミが他の誰かのモノになるのは嫌なんだ。

自信の無さでまだ隠されているキミの魅力を、ボクだけが独り占めしたい。

数十万人のファンがいて、自分の店もブランドも持つて、

『ユズ様』と慕われているこのボクが……

ずつとずつと求めているモノを持つているキミと、ようやく出会えたんだ。

今度行われる店のイベントに、キミとその友達を招待しよう。

そこでボクはキミと交流を開始して、

キミがボクに心を開くぐらい仲良くなつて、

ボクからキミに告白して、そして、そして……

そしてボクはキミと、永遠に変わらない関係を求めるんだ。

ボクを何者にも『変わらないう』ボクへと繋ぎとめてくれる、あの試着室の中で……

キミをこれ以上無いほどに可愛く飾り立て、そして愛し尽くすんだ。

ああ、想像するだけで心が躍る。

少女のように心がときめくし、少年のように胸がワクワクする。

絶対に、逃がさないから。

キミを『変える』のも、キミとの関係を『変わらないモノ』にするのも、
ボク以外にあえりえないから。

だから、ね？

どうかボクからの告白をOKしてね？

それでいつか試着室の中で、ボクと永遠の関係を築いてね？

じゃないとキミの自由を全て奪つて、

お人形さんみたいにボクのお部屋で飾っちゃうかもしれないから。

……でも、それもなんだかいかもしれない。
なんてね、えへへっ。

【END】